

戦禍の記憶と多様な文化



ジャーナル平原には、石壺が一面に広がる「サイト」と呼ばれる地域が点在する。中でもボーンサワンの西8キロにあるサイトは最大の規模で、最も大きな石壺が見られる。

ボーンサワンから北東へ約50キロ。高床式の建物が並ぶシェンキャオ村では、タイダム族の女性がラオスの伝統的な巻きスカートのシンを織っていた。



シェンキャオ村では、人を雇って小規模の織物工房を営む人もいた。天然染料を使った染色から機織りまでを一貫して行い、展示販売も行っている。



ひ孫を抱き、穏やかにほほ笑んでいたターチョーク村のモン族の女性。年配の女性は日中、子守をしたり刺繍をしたりしてのんびりと過ごしていた。



ナビア村でアルミのスプーンを作っていた、ベップチャン・タラウオンさん。材料は人から買うこともあれば、自分で拾ってくることもあるという。



工房の一角には販売所が設けられ、スプーンのほか、キーホルダーやアクセサリ類などたくさんの製品が並べられていた。販売は妻が担当する。



麺作りで知られるナウー村。20年以上のキャリアを持つという女性は、熱したプレートに水で溶いた米粉をのばし、フーと呼ばれる麺を手際よく作っていた。



ターチョーク村では、モン族の男性が激しく体を動かしながら、竹製の楽器ケーンの演奏を見せてくれた。笙(しょう)の一種で、ラオスを代表する楽器だという。



ポーノイ温泉に浸かってくつろぐカムー族の男性。周辺には簡単なトレッキングコースなども整備されており、宿泊してゆったり過ごすことができる。



山あいにあるポーノイ温泉周辺には多くの少数民族が暮らす。温泉横を流れる川を眺めると、何人ものカムー族の家族が薪を背負って歩いていった。



ムアンクーンには、アメリカ軍の空爆で破壊された建物も保存されていた。フランス植民地時代に建てられた病院だ。戦争の悲惨さを伝える建物だ。

朝霧が立ち込めるラオス北東部の町、ポーンサワン。標高1000メートルを超え、1月は特に冷える。私は車をチャーターし、郊外にあるジャール平原へ向かった。謎の石壺を見るためだ。

ラオ族のソム・ホンさんが運転する車は、まずツーリストインフォメーションセンターに止まった。裏庭に案内されると、おびただしい数の爆弾の外殻が目に見え、飛び込んだ。ベトナム戦争時、アメリカ軍がラオスの内戦に介入し、この地域に激しい空爆を行ったという。

「小学生のころ、ボール大のクラスタ爆弾を拾い、投げ合ってた遊んだことがあるんです。それを家に帰って父親に話すと、思い切り殴られましたよ」とソム・ホンさん。不幸にも、こうした不発弾で二人の友人を亡くした。「現在も大量の不発弾が残っていて、被害が絶えません」と話す。

途中立ち寄った旧県都のムアンクーンにも、空爆を受けた寺院が残っていた。寺院の仏像の片目はつぶれ、片腕の一部がえぐれている。空爆のすさまじさを想像させる、心痛む光景だ。

やがて車は大きな石壺が一面に広がる「サイト」と呼ばれる地域に到着した。代表的なサイトは三つあり、不発弾が除去され、安全に見学できる。

最初に訪れたサイトには二つの小高い丘があり、背丈ほどの細長い石壺が並んで

いた。全部で100個ほどあるという。

続くサイトでは、水田が見渡せる丘の上に約150個の石壺が横たわっていた。

最も見応えがあったのは最後のサイトだ。大人がひとり、すっぽりと入れる大きさの石壺がごろごろと転がっていた。大きいものは、高さ約3メートル、重さが6トンもあるという。石壺群は2か所に別れて広がっており、その数は300以上にのぼる。

調査によれば石壺の総数は2000個以上あり、紀元前500年から西暦500年ごろまでに作られたそう。用途は、酒壺や米壺などさまざまな説があるが、近くで人骨や副葬品などが見つかったことから埋葬に使われたのではないかと推測されている。鉄器時代の貴重な遺跡と評価され、「ジャール平原巨大石壺群」は2019年、ユネスコの世界文化遺産に登録された。

ソン・ホンさんは石壺巡りの合間に、ナビア村にも連れて行ってくれた。不発弾のアルミ材を使ってスプーンやアクセサリーなどを作る村だ。ペップチャン・タラウオンさんは溶かしたアルミを型に流し込み、ちょうどスプーンを作っていた。アルミキョから30本のスプーンが作れるという。戦争の負の遺産を巧みに利用して生活の糧を得るとは、なんともたくましい人たちだ。お土産に爆弾の形をしたキーホルダーをひとつ買い求めた。

翌日は、ポーンサワン郊外にある少数民族の村を訪ねた。カーブの続く道を30キロほど走ると、ターチョーク村に着いた。モン族の女性が家の軒下で刺繍をしている。カラフルで緻密なデザインが印象的だ。

次に訪れたシェンキヤオ村では、タイダム族の女性が糸つむぎや機織りをしていた。展示施設にはスカートやシル、民族衣装のシンなどが並ぶ。質の高い織物ばかりだ。

さらに足を延ばし、川沿いにあるポーン温泉を訪ねた。コテージやレストラを備え、宿泊も可能という。温泉では、近くに住むカム族の人たちが肩まで浸かり、仕事の疲れを癒していた。私もしばし足湯を楽しみ、冷えた体を温めた。

首都ビエンチャンからポーンサワンまでは飛行機でわずか30分。ラオスの知られざる歴史と少数民族の暮らしや手仕事が体感できる町は、新型コロナウィルスの感染が収束したら、新たな観光地として注目されそう。

堀内孝(ほりうち たかし)

1963年宮城県生まれ。写真通信社を経て、フリーの写真家になる。90年よりアフリカのマダガスカルを訪れ、人々の暮らしや独自の進化を遂げた動植物取材。97年からは東南アジアにもフィールドを広げ、少数民族の暮らしと手仕事を撮影している。著書に『マダガスカルへ写真を撮りに行く(港の人)』『マダガスカルのパオバブ(福音館書店)』『青い海をかけるカヌー(マダガスカル)』『ヴェネツィアの(福音館書店)』『海と川が生んだ(北山川)』(福音館書店)など。



左：シェンクワン県にあるポーンサワンは、1970年代につくられた新しい県都。ベトナムとの国境が近く、ベトナムナンバーのトラックも頻りに行き交っていた。中：ポーンサワンのツーリストインフォメーションセンターに展示されていた不発弾。町にはここ以外にも、不発弾について詳しく展示した2か所の施設がある。右：ポーンサワンのメインストリート、サイサナ通りにあるレストラン。アメリカ軍に投下された爆弾の外殻を入り口に並べ、装飾として使っていた。